

言うたらなんやいど

田辺聖子



角川文庫 4617

言うたらなんやけど

たなべせいこ
田辺聖子



角川文庫 4617

昭和五十五年五月十五日 初版発行
昭和六十年十一月三十日 十版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)二三八―八四五―

営業部(〇三)二三八―八五二―

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——文宝堂製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

言うたらなんやけど

田辺聖子



角川文庫 4617

目次

I	日々雑感	五
II	世相あれこれ	六
III	小説の周囲	一五
IV	わが酒・わが味	一七
V	旅・人・旅情	二四
解説	鴨居 羊子	二五

I

日々雑感

海坊主と私

正直のところ、私は良妻（賢妻）悪妻（愚妻）というのは、どんなのをさすのか、よくわからないのである。

だから、自分でも良妻か、悪妻か、わからない。人から良妻だといわれると、そうだ！　と思ふし、悪妻だといわれると、また、そうだ！　と思ふ。

だいたい、はじめから私は結婚する気なんか、なかったんだ。

私は同人雑誌の仲間が多かったから、ボーイフレンドも一ぱいいたし、そのころはみんな独身だったし（あとでみんな結婚した）小説を書いては持ち寄ってワイワイ合評し、あとで安い酒のみにゆき、楽しかったなあ。みんな年は食っていても、独りもので気が若いから、極楽トンボで、現実的な奴（やつ）は一人もいなかった。第一、当座の理想の小説ですら、賞をもらうなんて考えてるような人間さえいなかった。みんなの考えることは、ほかの仲間より面白い、いい小説を書いて、仲間をアツといわせること、それが、最高最大の目標だったのだ。

そんな生活でたのしく世を送っている私に、ヘンなオッサンがあらわれ、「結婚しませんか」という。ドングリ眼（まなこ）で図体が大きくヒゲが濃く、私は音に聞く大江山（おおえやま）の酒吞童子（しゅてんどうじ）か、海坊主のような感じがした。私のなつかしいボーイフレンドたちは、みな若くてきやしやな青年で、軽燥な

ることカルメラ焼きの如く、気がよくたのしい連中ばかりだったのに、オッサンはそれらよりずっとオトナである。

それは私がわるいので、私は三十八にもなっていたけど、精神年齢は二十一、二ぐらいだった。しかし世間普通の人間ならそのぐらいのトシになれば、もう立派なオトナである。

彼は私より四つ上で、おまけに前妻に死に別れて四人の子供とワンセットになっており、その上、両親弟妹がいて、開業医である。これでオトナにならなければウソである。

私は少女の頃から、夢をもっていて、私のために二人の男が決闘するということになれば、うれしな、と思っていた。それで、海坊主氏にいったら、氏はおちついて、

「では、相手の人が申し出るのをまちます」といったが、誰も申し出てくれない。

「無投票当選ということですか」と氏はますます、おちついていう。私は相手のいいなりになるのがシヤクである。

「半年も保たへんと思うわ」といったら、

「半年、保ったら大変なものです」

と、海坊主は自若^{じじやく}としていた。

「私、ワガママよ。たくさんの人間の中では生まれへんわ」

私は、母と二人で暮らしていた。妹も弟も結婚して独立していたから、私は甘い母にワガママの限りをつくし、望月の世を謳歌^{おうか}しているハイ・ミスだったのである。海坊主はすこし考え、

「では、べつに家を買いますよう」

と、煙草たばこを買うようにいつて、ほんとに買ってきた。神戸港が目の下にみえる山のとっぺんの異人屋敷である。彼は別居して双方、時間の都合のついたときだけ、そこへいったらいい、という。私は一生けんめい考えたが、ほかに、吹っかける難題もみつからなかったので、とうとう結婚した。

別居結婚というのは、面白いけれども、どうもゆき来が疲れる。それに電話代がかさむ。

ただ、ケンカしたときは便利である。海坊主はケンカすると口が重いから黙ってしまふ。

私は「あほ、まぬけのスカタン、おたんこなす、くやしかったらなぐってみろッてんだ、ガチヤン」と言いたい放題いつて電話を切れるのだ、これがうれしい。それに向うは、すこし動作がスローモーなので、私のバリザンボウの前に電話を切ろうとせず、じっと忍耐づよく最後まで聞いている。いじらしいところもあるのだ。

よくできるところもある。

そのせいでもないが、とうとう、同居した。直接的なキッカケは、彼の父が死んだからで、おじいちゃんが脳溢血のういつけつで倒れた、というからお見舞にいったら、ほどなく死に、葬式や何かでずるずるに、彼の家にいつき、仕事がいそぐので、そのまま、空いた一室へ机を買ひこんでそこで仕事をしているうちに、日が経った。つまり私たちは野合やごうの夫婦である。

彼の家は、診療所のうちに自宅があり、このあたりは下町で、山の上の異人館とはたいへんな

ちがい。異人館は鎧屏があつて海が見えて、ベランダや庭があつてモダンだったのに、下町の家には庭も鎧屏もあらばこそ、あるのはただ、人、人、人である。子供は当時、中一から小二まで、姑がいて、彼の叔母がいて、小姑二人、一人は妹で、これは適齡期すぎて嫁にいく気配もなく、一人は弟で外科のインターン、もうやたら見知らぬ人間がゴロゴロして、その中で私は主婦見習いと作家の店をひろげていこうというのだ。なんと、けなげではないか。

「こんな良妻、あるもんか」

と口癖にいつて、そのたび海坊主は、

「うむ、えらい、えらい」

と私のあたまを撫でていた。男には、いわないとわからぬところがあるのだ。「いわんでもわかつとるやないか」と往々、亭主たちというが、あれはウソである。ときどき念を押して妻の偉業を鼓吹・宣伝する必要があるのである。

私はその頃から、ともかく、朝だけは早く起きることにしていた。夜、どんなに仕事があつても、朝は、夫や子供より早く起きる。

妻の仕事というものは、結局のところ、家族のだれよりも早く起きる、ということにつぎるのである。夏なら窓をあけ放して冷たい空気を入れかえ、冬ならばまずストーブで部屋をあたため湯を沸かし、弁当をつくる。それができたら、妻の仕事は半分がたすむ。あとは手ぬぎしたって目立たない。というより、弁当を作ろうと思うと、どうしても人より早く起きてしまう。

また因果なことに、私は、朝起きがにが手なくせに、弁当づくりは好きなのだ。一人ずつ中学校へ入り出すと、弁当がふえてきた。

一日の献立をつくり、晩ご飯は私がする。だから、べつに妻の義務、という悲壮感で早起きしているわけじゃなく、したいことをしたいから、むりをして早起きしてるわけで、まあいえば、これもワガママの変型だ。

私は才能はないが、もしあるとすれば、好きなことをみつける才能である。

この海坊主の自宅は、ただ一つのとりえは下町であるということで、私は、高級住宅街も好きだが、下町も好きである。

（だいたい私は、いま自分のいるところを、どこでも一ばん好きになる、という癖がある。かなり安手の女である）

家の前をずっと南へさがると、昔の赤線の福原遊廓ふくはらあそびかくのメインストリートで、いまでも紅燈のちまたである。その風情ふぜいが好きで、海坊主にせがんでよくつれていってもらった。それから横丁の路地で飲んだり、おでんや、焼鳥や、屋台のラーメン屋を教えてもらい、すぐ好きになった。

まだある、パチンコにスマートボール、私は何にでも夢中になりすぎる癖もあり、貧血をおこすまでパチンコに熱中していて、とうとう、

「ええかげんにせえ！」

と、どなられてしまった。屋台に首をつつこんで飲むコップ酒も、教えられて大好きになった。

どうして私はこう、主体性がないのであろうか。

オッサンの教えてくれるもの、みな、大好きになるのである。

「酒も飲まんと何の人生じゃ」

と海坊主はいう。私は毎晩、酒を飲むのを教えられ、これまた大好きになった。

この家へ来た当座、彼の枕元まくらもとに、いつもお盆にのったアルミのやかんがあるので、ふしぎに思っていたが、それは、夜中、のどが乾いたときにやかんに口をつけて彼が飲むためであったのだ。私ためしにやってみたら、じつに美味い。酒を飲んだ夜のやかんの水は、これはもう甘露である。こればかりは、

「女だてらになんだ。男のマネするな！」

と叱しかられた。

海坊主はまた、診察室でヒマなとき（ヒマなときが多いのだ）大きなオナラをしている。

私もついにしてやったら、また、

「男と女はちがう。つつしめ！」

と叱られた。

そのほかは、だいたい、同じようなことをしている。ヤツが診察室で仕事をしているときは、私もベンをもっている。しかし海坊主は私の書いたものなんか、よまないのである。

彼は「ゴルフ上達早わかり」とか「囲碁入門その一」などを読むのである。そうしてくり返し

新聞を読む。つまり、いかにヒマかということで、最初、私はもつと診療所を近代的にきれいにし、ハイカラにしたいと思ったが、彼が「きれいにすると、みんな恐れをなして、よけい来なくなる」というので、それもそうかと感心して、そのままにしてある。

だからウチの診療所は、大正時代の医院みたいである。

私は子供の教育について、エリート風に育てないといかん、と思っていた。しかしテキは、「子供なんてエサと着るもんさえやつといたら自然に大きくなる」という。私はまた感心して、試験の成績や塾へ通わせることをキャッキャツといわなくなった。

こうしてみると、私は海坊主の影響を、百パーセント、うけている。

ヤツはヤツで、私にだいぶん、感化されて遊び好きになった、とぼやいているが。

いろいろ考えてみて、私はどうも、すぐ、感心しやすいようにできている。それから、何でも彼の好きなものを私も好きになるようにできている。「亭主の好きな赤烏帽子あかえぼし」というのではなく、私に個性がないせいかなあ、なんて考える。

いつのまにか、結婚して七年もたってしまった。これでも一応、結婚式だけは、七年前、神戸の山手の小さな教会であげてもらったのである。

七年たった間に、舅しゅうと・姑を送った。叔母は帰郷し、義弟は結婚して一家をかまえ、私は二年ほど前から家政婦さんに来てもらって、買出しや掃除や雑用をしてもらう。しかし、やっぱり、一日の献立は私がきめ、朝食と夕食は私が料理する。毎日の献立だけはたいへんだと思うが、しか

し、七年間、みな生きてきたのだから何とかかわせてはきたのだ。えらいものではないか。

誰もほめてくれないときは自分でほめておけばよいのだ。海坊主はさすがにもうこの頃では、私のあたまなど撫でて機嫌をとってはくれないのである。

ヤツは何のために働いてるかという、夕食と晩酌のためだそうである。そう聞くと私も、全く、その通りだと思う。だらしない。

何でそういういちいち、ヤツのいうことに同意せんらんねん。

しかし私は、子供たちを早目に食事させ（診察が終るのは午後八時で、餓えた子供たちはそれまで待てない）あと、オトナ二人の食事を並べているとき、廊下をやってくるヤツのスリッパの音が聞こえると、七年、顔をつき合っているのに、やっぱり、悪い気はしないのである。

うれしいな、と思う。

それは半分ぐらい、食事と酒にありつけるからかもしれないが、まあ、それでも独りで飲むよりはたのしいのは事実である。

それから、そばに男がいるというのは（たとえば海坊主にせよ）女にとっては、うれしい華やきである。

私は世の奥さんで、旦那のワルクチをいうのに日も夜もない人の、その心理がわからない。

私は、男がそばにいる女の幸せを、妻はもっと感謝すべきだと思う。やっぱり、男がいるのと、いないのとでは、女の人生がちがう。男がそばにいない運命の女たち、離婚者や、まだ相手にめ

ぐりあつていない未婚者や、未亡人はしかたがないけれど、幸いに、男が丈夫で仲もわるくなく、暮らしている女は、どんなふうにも男をだいいじにしても、しきれないぐらい、だいいじにするべきである。

——というのは、私は三十八で結婚したから、独身者と結婚者の二つの世界を経験した。どちらもいいところがあり、どっちもわるいところがあるが、しかし、自分だけの男が、行住坐臥、自分のそばにいるという愉しみは、これはほんとは、たいへんな幸福なのである。

それは女をふかい意味で生かし、この人生において、生きることの何たるか、愛することの何たるか、たのしく老いることの何たるかを教える。

それを考えたとき、私は夫と妻という名でよばれる、男と女の生活に、重たい意味をくみとらずにはいられない。もしそれに気付けば、良妻、悪妻の定義など、何であらうか。ゴミクズみたいな観念である。

私にとっての夫とは、七年間、毎日、夜八時に診察を終えてやってくるスリッパの足音を聞くとき、胸がときめく、それだけである。——そしてそれは、いつ別れるかしかない、という不安に支えられているから、その飲よるびはなお色濃い。死別はもとより、いつ、双方心がわりして愛がさめるか、海坊主だとして男だから、いつ、浮気が本気になるかしかない。私も右に同じである。そのために、彼と共にいる一瞬一瞬は、黄金のときである。(73・3)

母というもの

母親とは何だろうか。何とも厄介やっかいな存在、重たいお荷物というか、腐れ縁の道づれ、というか、私にとつてはそういう、モヤモヤした混沌こんとん未分のシロモノである。

だいたい、女親と娘というのは、二者一体のもので、臍へその緒を切つてもまだ切れないものがつづいていそうに思えてならない。

これが男親と息子だと、反撥はんぱつしたり親しんだりさまざまでも、一応独立した個と個の人格として対せるだろう。しかし母と娘はいつまでもべったりである。

そのべったりが、どこで一応、はじめがつくかという、娘が子供をもち、新たに母となる時である。そのとき娘は母を離れ、こんどは子供にべったりとなる。

だが、息子しか持たなかった母親たちは何か、すぎま風が身内を吹くような、心もとなさそうな、飄々ひょうひょうとたよりない風情をもっていたりするものである。同じ子どもでも、娘をもった母親は満たされたような、密着ムードで輝いてみえる。娘と母親が、まるで頬ほを舐なめんばかりに近々と寄りあつて、べちゃくちゃと喋しゃべっていたりするのを見ると、女から女へという太古以来の連綿たるきずなを見る気がする。

どうも生物学的に、男は、派生的な、ツケタリの種族みたいに思えて仕方ない。私の図式によれば、女―女―女と無限につづいてゆくのであって、母系制というのは自然の原理にもとづいて